

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生活のなかで環境を考える (私のスケッチ・ブック (30))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005913

生活のなかで環境を考える

国立民族学博物館 教授
森 明子

■外国でバッテリーを調達する

5年ほど前、ドイツに長期滞在したときのことである。アパート生活をはじめてまもなく、パソコンの調子が悪くなった。コンピュータには海外でのトラブルについてもサポートが約束されている。とはいえ、コンピュータのトラブルを第三者に伝えるのは苦手で、それをドイツ語でしなければならないというのはもっと億劫だった。それでも苦労して手に入れたデータが、いつ消えるかわからない不安にはかえられない。サービスセンターに電話すると、幸いなことに、すぐに私の抱えた問題状況を理解してくれた。それはバッテリーの消耗である、すぐに新しいものを送ってくれるという。保証期間中なので無料のサービスだが、配達に訪れた者に不要になったバッテリーを渡すこと、したがって配達日に待機していなければならないが、配達時間は不明であると言われ渡された。

約束の日、私はまだ慣れないアパートで、朝早くから待っていたが、結局午後6時をすぎても、ベルを押す人はいなかった。配達員が呼び鈴を見つけられない

のではない、ベルが鳴らないのではないかなど、私は想像力をたくましくしてあらゆる可能性を想定し、そのひとつひとつに対応策を講じながら一日を過ごした。笑い話になるようなこともあったのだが、ここでは詳細は省こう。

■配達されなかったバッテリー

丸一日つぶされて、たいへん消耗した私は、件のセンターに電話した。翌日になって目当ての担当者と連絡がつき、どうなっているのか問いただすと、その回答は、私の予想もしないものだった。

彼は、過日の電話のあとで、自分の対応した顧客が日本人であるということから、ある思いにとらわれたらしい。「はたして日本人に、このバッテリーを配達していいのか？」それでは、そのバッテリーは、私のコンピュータに適合しないのかと尋ねると、機能上はなんの問題もない、という。では何が問題なのか？

話を聞いているうちに、彼がバッテリーの機能ではなく、それを構成している物質の成分を問題にしていることがわかってきた。鉛か何かの配合率が違うと考えているらしい。「日本は環境問題に厳

しいルールをしいているから、このバッテリーを日本で廃棄することはできないだろう。すると私（顧客）が困ることになる。だから送らなかった」。では、私がそれを廃棄する時期はいつになるのかと尋ねると、おそらく数年後だという。

私には、この申し出は現実味のないものに思えた。現にトラブルに直面している私のために、なんと迂遠な思考をしたものだろう。

バッテリー廃棄が数年後なら、時間は十分ある。だが、いまこのときの私の必要はどうしてくれるのだ。半年以上の研究生活を想像して、まことにみじめな気持ちになった。

それにしても、彼が私に断りなく予定変更したことは、明らかに手落ちである。私は一日中待機していたのにと問い質すと、彼は「電話したが留守だった」と答えた。それきりにしてしまっただろう。

これは私の身になれば、しごく無責任な仕事振りと思えるが、彼はそれほどには思っていない様子だった。彼にとっては、顧客に電話したという事実が、たとえ連絡がつかなかったにしても、ルールを満たしていたのだろう。電話したとき顧客がたまたま留守だったのは、彼の責任ではない（もちろん顧客の責任でもない！）。

彼の立場からすると、彼の行動はコンピュータ機器を扱う専門職として、適切に判断した結果として説明されるらしい。その判断とは、顧客の故国の環境基準に適合しないと思われるバッテリーを



家庭の居間に客を迎えるテーブル。キャンドルを好む（2006年3月 ベルリン）

不用意に渡さないことである。

彼のプロフェッショナルがどうあれ、私にバッテリーが必要だという状況は変わらない。再度の要請に対して、彼は、私がドイツで流通しているバッテリーを受け取る意思があることを確認した上で、配達させることに同意した。数日後、私はバッテリーを受け取った。

■「環境にやさしい」イメージ

このできごとは、仕事やサービスに私たちが何を期待しているか、また、環境に配慮するということが、実際にはどのような行動をさすのか、ということを考えさせる。

私はいまでも、世界にサービス網をはりめぐらしているコンピュータの付属品が異なる規格をもつという話は、曖昧だと思う。あるいは、そのようなことがあるのかもしれないが、電話で応対したドイツ人男性も、その正確な知識をもっていたわけではなかった。彼は「日本は厳しい環境規制をしいているだろう」と私

の同意を求め、「だから、このバッテリーもきっと基準外だと思う」と言っていた。

私が注目したいのは、彼が日本に対してもっている、この感覚である。彼は日本を環境に配慮したすぐれた技術をもつ国で、日本社会も環境意識が高いと考えている。彼だけでなく、日本が環境問題においてすぐれた国であると考えた人は、ドイツに少なくない。

だが、私にとっては、ドイツこそ環境先進国である。これは多くの日本人が共有するドイツのイメージでもあると思う。

■環境にやさしい「技術」と「意識」

では、実際はどうか。たとえば自動車の排気ガスについては、日本は欧米に先駆けて早い時期から厳しい基準を設け、それを実践してきた。それは情報として知ったというより、むしろ20年前に町を歩きながら、私が自分の鼻と肺で実感したことである。ただし近年では、ヨーロッパでも排ガスの規制が厳しくなって、道路の空気もずっとよくなっている。

一方、人々の行動様式についてみると、ドイツ社会は、生活のさまざまな局面で環境に配慮していると感心することがしばしばある。レジ袋の使用については、最近やっと日本でも意識化されてきたが、ドイツでは早くから徹底していた。それはスーパーマーケットの販売方式に組み込まれていて、どの会社のどの店舗であっても、一律の共通システムがはたらいっている。同様に、商品の包装、ゴミリサイクルなど、消費者の生活と結

びついたところで、環境への意識的なとりくみが、社会全体にくまなくゆきわたっている。

だから私は、ドイツ社会は日本社会より環境意識が高いというイメージをもってきた。ドイツ人から、日本のほうが環境基準が厳しいといわれたことは意外で、場合によっては、冗談か皮肉だと思ったろう。

このできごとの後、しばらくしてから日本は環境に配慮した技術開発において、世界でもトップクラスであると聞いた。そうした技術は、特殊な機械として、工業部門において生かされているらしい。目に見えないところで行われているので、どうしても伝聞体になる。一般には、あまり知られていない。

日本の高度な技術が環境に配慮している、国際的な評価を受けているというのは、「技術の国」日本の面目躍如で、すばらしいことだ。だがこのことは、日本に住むひとりひとりの人間が、環境に対する意識が高いことを意味するわけではない。技術が環境にやさしくても、人がやさしくなければ、「やさしい」という言葉は空中分解してしまう。

■技術の発展と環境のバランス

1980年代の半ば、私はウィーンの友人がいちど使ったラップ（食品の鮮度を保つ）を、ひきだしに保管して再利用しているのを見て、たいへん驚いたことがある。そのとき私は、ウィーンではこれからラップが普及していくのかと思った。だが、そうではなかった。ラップの使用は、人によって異なるのであって、台所

に常備しておく人もいるが、使わない人はまったく使わない。「どうしても必要だというほどのものではなく、しかも環境によいものではない」というラップの位置づけが、個人によってこのように異なる使い方にあられていたのである。

同じころ、テレビのニュースでアスベスト汚染された小学校の教室の映像を見た。私はそのときはじめて、アスベストに対する人々の意識を知って驚いた。と同時に、それがなぜ日本で問題になっていないのか理解できなかった。それが20年ほどたった後に、日本で取りざたされることになったとき、私は皮肉な気持ちで20年前の映像を思い出した。

環境の問題は身体と関わっている。自然環境と人間の身体の関係は、それぞれの地域で長い時間をかけて培われてきた。技術は、この両者の長期にわたる相互作用のなかで形成されてきたものである。農業や狩猟、漁撈の技術は、したがって、地域の環境や人々の身体に埋め込まれている。

だが、近代以降の技術は、長い歴史をかけて積み上げてきた地域の枠組みを、やすやすと越えていく。アスベスト対策の遅れは、このような技術と身体の乖離を端的に示す例といえるだろう。技術を、私たちの身体や環境のなかで捉えなおす必要があるようだ。

コンピュータのバッテリーを調達する



週末の午後、極寒のなか、日光を楽しむ人々（2006年2月ベルリン）

にあたって、私はそれを廃棄するときのことなど想像もしなかった。そこには、機械のパーツを身体から疎遠なものとして捉える無意識の感覚、先端技術に対する距離感とでもいうものが、作用していると思う。

現代社会のように、大量の技術を社会のなかで使っていく以上、このような技術に対する疎遠な関係は、見直さなければならない。さもないと、社会にますますいびつな状況が生まれるだろう。

社会が技術を使いこなすという状況をつくること、換言すれば、流動する技術を社会に埋め込むための努力が必要だと思われる。たとえば買い物にエコバッグを持参することが社会常識になっている状況でもいい。それは、プラスチックの際限ない生産の流れを制御しようとするものであり、社会が技術を飼いならすための一歩を示しているように思える。